

## 外国語としてのロシア語能力検定試験（初級レベル）

トルストグーゾフ アレキサンダー<sup>※</sup>

ロシア教育科学省主催「外国語としてのロシア語検定試験（以下TORFL）」は、既に10年以上実施されている。通常、各テストというものはある目的のために、さらに具体的な状況に見合った形で作成される。熟達度テストであるTORFLの目的は、「コミュニケーション言語能力」の測定である。テストの利点と欠点、有効性は、テストの目的がどの程度達成されたかで判断する必要がある。本稿では、初級レベルのTORFLの概要（テストの構造と内容、採点基準とパラメーター）と問題点の検討を通じて、テストでコミュニケーション能力がいかに測定できるか検証する。

### 1. 初級レベルのTORFLの概要

TORFLの初級レベルの具体的な内容は、1999年に出版された『Государственный образовательный стандарт по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Проект (外国語としてのロシア語の国家教育基準。初級レベル。案』（以下、99年版）によって決められている。2001年に『Государственный стандарт по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Проект. Издание второе, дополненное и расширенное (外国語としてのロシア語の国家教育基準。初級レベル。案。改訂版)』（以下、01年版）が出版された。

99年版と01年版では、初級レベルで要求されるコミュニケーション活動領域、テーマの簡単な記載に続いて、必要とされる技能（聴解力、読解力、作文力、口頭発表力）の内容説明と言語構造能力の細かい記述がある。

2001年に発表された『Образовательная программа по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень.

Базовый уровень. Первый сертификационный уровень (外国語としてのロシア語の習得プログラム。初級レベル。基礎レベル。第1レベル)』（以下『プログラム』）は基準を拡大する。2001年に『Программа по русскому языку как иностранному. I сертификационный уровень. Общее владение (外国語としてのロシア語のプログラム。第1レベル。総合能力)』も出版されているが、「プログラムは包括的なCEFR<sup>1)</sup>能力記述文のパラメータ・カテゴリーをロシア語学習に関して具体化したものである。そこでは...能力尺度に関する抽象的な記述のみならず、活動領域・テーマ・課題・場面ごとの具体的なコミュニケーション活動内容、さらにそれらのコミュニケーション活動に必要な言語表現形式、言語構造知識の全体が記述されている<sup>2)</sup>」。とする林田の第1レベルの「プログラム」に関する説明は初級レベルにも当てはまる。TORFLは、テストの対象を明確にし、すべての技能を対象とするので、かなり高い妥当性を持つといえよう。

さて、テスト本体については1999年に『Типовые тесты по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение (外国語としてのロシア語能力検定試験。初級レベル。総合能力)』（以下、99年版）が出版されたが、その後、再出版されることはなかった。ところで、理論的にはテストの問題はできるだけ頻繁に改訂されることが望ましく、利用されたテストは公開され、学習に使われるべきである。しかし残念なことに、現状では新しく作られた問題がデータバンクに蓄積されるにもかかわらず、使用済みのテストが公開されることは非常にまれである。その後、2004年に、教育科学省の管轄で、別のグループの著者で作成された『Типовые тесты по русскому языку как

※青森公立大学准教授

иностранному. Элементарный уровень. Общее владение. Новая версия (外国語としてのロシア語能力検定試験。初級レベル。総合能力。新バージョン)』(以下、04年版)が出版されている。タイトルに「新バージョン」が加えられた。この「新バージョン」は数回、再出版されて、現在も販売が続いている。

「新バージョン」は以前のものに比べ項目の数と形式に違いがあり、下位テストの配列も変わっている。新バージョンであるならば、その特徴がどこにあり、どのような課題を解決するために作られたのかについて説明がなければならない。ところが、04年版には99年版にあった、教員と試験官のために不可欠な方法論的な説明と詳細な案内がない。この情報は受験者には必要かもしれないが、教員にとっては必須情報である。

99年版の「受験者へのメッセージ」では、重要な情報であるテストの評価システムについて詳しく述べられている。一方、04年版では、評価に関する数字がまったく見当たらず、合格ラインのパーセンテージすら明らかになっていない。このように、テストの根幹に関わる情報について説明が不十分な点は04年版の大きな欠点といえるであろう。

## 2. 語彙・文法力テスト

外国語の習得は多面的なプロセスであるため、テストによって測定される対象は非常に複雑な性格を持つ。通常興味の対象は言語能力なのだから、直接テストすべきは言語能力であってそれを下から支えている能力ではない。しかし大規模なテストのほとんどはまだ文法セクションを残しているだろう。その理由は短時間に大量のアイテムを簡単に実施・採点できることにちがいない。これに関連して多くの文法要素をうまくサンプリングするならテストの妥当性も高まる。TORFLでは、言語活動における様々な知識と技能が試されると同時に、言語活動の基礎となる語彙・文法の知識についても測定が行われる。

99年版の「語彙・文法テスト」は以下の5つの

グループから100問が出題されている。テスト全体の配点は100点である。グループ1で語彙がチェックされ、グループ2 - 5で文法がチェックされる。

- (1) 語彙の与えられた文脈での意味の理解と用法 (問1 - 15)
- (2) 名詞、人称代名詞、形容詞の性、数、格形 (問16 - 25)
- (3) 与えられた文脈での名詞の前置詞一格形の正確な用法 (問26 - 65)
- (4) 場所表現と与えられた文脈による基本的な動詞の正確な用法：不定詞の用法、時制形、接頭辞運動の動詞用法 (問66 - 90)
- (5) 単文、複文の用法 (問91 - 100)

04年版では設問の数は70に減少している。また、6つの明確なパートに分けられているが、その基準は明らかにされていない。問題内容については語彙の問題の数が増えたのにたいし、文法の数はかなり減少している。試験時間は99年版と同じ50分なので、04年版では1設問当たりの時間がより多くなっている。語彙を産出的にテストするのは非常に難しいので99年版と04年版の語彙のパートも多肢選択の形式を持つ。ところで、99年版ではすべての問題が文脈がまったくない文で構成されていたのに対し、04年版では大部分を占める文法の問題が文脈を持つテキストとして出題されている。04年版は多肢選択の形式だけでなく、空所補充と多肢選択の要素を含む穴埋め問題形式になっている。

たとえば、名詞の格形のパートの一部は以下のようなものである。

Марат Сафин-известный российский теннисист. Марат родился…(35).  
В детстве, когда…(36) было 6 лет, он мечтал…(37). Но тренер не взял его…(38).

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 35. (A) В Москву | 36. (A) Марат     |
| (B) в Москве     | (B) Марата        |
| (B) о Москве     | (B) Марату        |
| (Г) из Москвы    | (Г) Маратом       |
| 37. (A) футбол   | 38. (A) в команду |
| (B) футбола      | (B) в команде     |
| (B) футболом     | (B) из команды    |
| (Г) о футболе    | (Г) о команде     |

文脈のあるテキストによって設題するという点はテスト構成にとっては重要である。文脈を与えることでタスクがより現実的になり、受験者の能力のより妥当性の高い測定につながる。文法の課題はコミュニケーション・テストにより相応しくなった。筆者の所属機関で練習の目的でこのテストを受けた学習者からは、04年版のテストはより面白く、魅力的になったという感想が聞かれた。

### 3. 読解力テスト

「読解力」テストの目的は、国家基準に定められた特定の言語伝達の課題に対する受験者の「読む」能力の測定である。リーディング能力をテストするのは、一見非常に単純である。しかし、基本的な問題は、受容的スキルというのは、それを駆使しているときも、外から見えるような明らかな行動にかならずしも、現れないことである。テストの目的は、受験者にリーディングスキルを駆使させるだけでなく、そのスキルを用いて理解に成功したことを示す行動を引き出すことである。問題は、そのスキルの正体は何であるか、あるアイテムがそのスキルをうまく測定できているかの判断が困難なことである。幸いに、読みの能力を「全体的な」指標で十分な熟達度テストなら、下位スキルをテストに含む必要ない（ヒューズ、A. 2003）。そのため、テストは以下の形のものになる。

99年版テストは2パート（30問）で構成され、辞書の利用は可能である。テストの時間は45分、1問につき4点の配点、試験全体では120点配点となる。

（問1-10）は、10ワード前後の短い単文の内容について、整合性のある続きの文の選択。テストで使用するテクニックに関して重要なのは、読む行為自体にはできる限り干渉しないようなものであることと、読むこと自体に加えてさらに著しく困難な作業を強いるようなものでない、ということである。学習対象言語で書かせるのは特にそうである。そのため、本テストでマッチングアイテム方式の設問（2問にたいして4つの選択肢から解答）が出される。

（問11 - 30）は、450ワードの長文の概要、およびポイントとなる情報の整理。この設問は、簡略化された文学作品テキストが出題され、設問は多肢選択（選択肢3）問題である。語数は、『基準』で定められたもの（99年版では200 - 250単語、01年版では250 - 300単語）をかなり上回っている。妥当性と十分な信頼性を得るために、1つのテストに可能な限り多くのパッセージを含め、受験者が何度も新しい課題に挑むようにしなければならない。04年版は試験時間が45分から50分になり、5つのパートから構成されている。

（問1 - 4）は、短い単文の内容について、整合性のある続きの文の選択。

（問5 - 8）は、20ワード以下で書かれた広告の内容の理解。

（問9 - 12）は、30 - 40ワードで書かれた新聞・雑誌記事の抜粋について、文章のテーマと概要について内容に合致する文の選択。

（問13-20）は、130ワード文章について、テーマや概要、重要な詳細情報の理解。

（問21-30）は、300ワードからなる長文の概要及びポイントとなる情報の理解。

文章理解は、その文章が書かれた目的を理解することがポイントとなる。99年版の（問1 - 10）では、ロシア語で書かれた情報から該当するシチュエーションを理解し、現実生活の中で何らかの言語以外の行動を遂行するような設問が設定される。このようなタスクはオーセンティックな性格を持ち、コミュニケーション・テストに相応しい。ところでテスト中、大きな割合を占める（問11 - 30）の長文はオーセンティックな文学作品ではあっても、「内容にあった選択肢を選びなさい」というようなタスクを持つ伝統的な形のテキストである。現実の生活で何の目的もなく何かの文章を読んで、後でその内容について誰かから尋ねられるということは、ほとんどないのである。

04年版では、99版に比べて、パート1が同様な形を持つ。また、量的にはより短い2つの文学的なテキスト（パート4と5）が含まれているが、そのほかにロシア語の情報誌や新聞でよく見かけるタイプの、オーセンティシティーの高いテ

キストのパート2と3も加わった。たとえば、問5は「注意！明日は芸術ギャラリーにて毎年行われる《地球と人々》展覧会があります」という広告の内容の理解の課題である。実生活のリーディングでは、読み手が自分に必要な情報を求めて読むわけだが、そういう意味では04年版はよりオーセンティシティーが高いテストとなったと言えるであろう。しかし、まだ完全な意味でのコミュニケーションテストの性格を持つにいたっていない。さらに、04年版の語彙のレベルはより高いものとなっており、ボリュームもかなり増えている。

#### 4. 聴解力テスト

このテストでは、現実の様々な短いモノローグと対話形式の概要や詳細情報を理解する「聴く能力」が測定される。99年版のテストは3パート（20問）と試験要綱を含む。実行時間は25分である。辞書の利用は認められておらず、すべての設問は2回再生される。3つの選択肢より解答を選ぶ形式となっており、試験全体の配点は100点である。

（問1 - 5）モノローグ形式の8 - 10単語のセンテンスの内容理解。

（問6 - 8）短い5 - 6文のダイアログのテーマ理解。

（問9 - 16）60単語前後のダイアログにおける談話意図の理解。

（問17-20）13文（110単語）からなるモノローグのテキストの主な内容と補足的情報の理解。概要は、観光地であるウラジミル市の見学の案内文である。

パート1では、それぞれの課題がテーマ的、ジャンルの共通性を持っておらず、コミュニケーション意図も不明確なものとなっている。パート2の問6-8では、受験者は会話がどこで行われるか（路上で、バスで、市街地で）を答えなければならないが、実際的なコミュニケーション価値は低い。聞き取りにおける主な課題は、会話がどこで行われるかを判断することではなく、会話の内容を理解して自分に必要な情報（バスがどこへ行くかなど）を抽出することである。

ずだ。パート2の問9-16は受験者とは関係のないストーリーを聞き取る課題であり、コミュニケーション価値も低い。パート3はガイドから観光客に対して与えられた情報を理解する課題であるが、「聴解力」テストでの唯一、コミュニケーション価値を持つ課題となっている。

04年版は、実施時間が25分から30分に増えている。

（問1 - 4）モノローグ形式の8 - 10単語のセンテンスの内容理解。

（問5 - 7）短い5 - 6文のダイアログのテーマ理解。

（問8 - 11）10文からなるダイアログのポイント理解。

（問12-18）135ワードからなるダイアログの必要情報の理解とメモ作成。電話での会話。ロシア語講座についての問い合わせの場面。日付、時間、授業のスケジュール、場所の情報の理解。メモを書かせる設問はよりオーセンティックな課題となる。残念に、メモ用紙の質問では、“何月”と“何月何日”の項目が重なるので課題は余計に複雑なものとなる。

基礎レベルにおける2つのバージョンの「聴解力テスト」の比較に関する林田の結論は初級レベルにも当てはまる。「両年度で大きく異なる点は05年版で新しくタスク方式の問題が2問加えられたことである。日常生活において、言語技能の各能力は実際には単独で成立しているのではなく、多くの場合に総合的コミュニケーション能力として各技能を複合的に使用する力が求められる。今回、聴解力のみならず、書きことばでそれを再現する力を合わせてタスク方式問題として出題している意図も、そのようなより現実的な日常生活における活動力としてのコミュニケーション能力を受験者に求めていることの証であると思われる<sup>3)</sup>」。このような課題は初めて初級レベルのテストに導入されている。

（問19 - 25）175ワードからなるモノローグの必要情報の理解とそのメモ作成。ガイドから観光客に与えた情報。解答用紙に答えの記入。答えは、銀行と外貨両替所の営業時間、ホテルから町の中心まで交通便と料金、この日の歓迎パー



ティの時間と場所、などの情報理解。

04年版の内容は確かにコミュニケーション・テストの目的により良くマッチする。しかし、聞き取り設問の量が260単語から470単語に増え、聴解力だけでなく記憶力も必要になった。また、語彙レベルも初級レベルよりは基礎レベルに近いものであり、特別の練習なしで受験は難しくなっている。

## 5. 作文力テスト

「作文力」テストは、ある情報を書き留める能力と与えられたテーマに対して筆記発話の能力を測定するテストである。課題ではテキスト再現力、すなわち、受験者はテキストをそのまま写すのではなく、自分なりに情報を変形することが求められる。設問はフリーレスポンスアイテム形式の課題である。辞書の使用は可能である。

99年版はテスト時間が50分、タスク型の2つの課題からなる。設問1は、185単語からなるテキストの主な内容を与えられた課題に沿ってまとめる。ここで使われているテキストは簡略化された文学作品である。ロシアの物理学者ストレットフのライフストーリーのテキストを読んで、彼はまだ学校に通っていなかった時に何をしたことができたか、または、学校の生徒であった時に何をしたことが好きであったかの情報整理である。この課題はコミュニケーション的な性格を持たない。

設問2は、与えられたテーマについて、設定された質問を手がかりに5文以上の文章を作る。受験者はまだ学校に通っていなかった時に何をしたことができたか、また、学校の生徒であった時に何をしたことが好きであったか、さらに、現在、暇な時に何をしているかの文章の作成である。

04年版ではテスト時間が40分に減り、タスク型の1つの課題となっている。与えられたテーマについて、設定された質問を手がかりに、受験者はロシア人と文通するために相手に自己紹介の手紙を書く形式の15文以上の文章を作るという設問である。

99年版では、与えられた文章の要約が主なタスクであったが、04年版では手がかりとなる質問こそ与えられているが、ほぼ自立的な活動としての文章作成能力が求められている。

ライティング能力を査定するときに重要なのは、独立タスクを可能な限り数多く設定することである。04年版のテストでは課題が1つになったが、与えられた質問の数と書くべき量も増えてきた。こうすることで信頼性が高まり、それによってまた妥当性が高まるのである。もう1つの重要なポイントは、ライティング能力以外のものを測らないことである。テキストの主な内容のまとめの課題である99年版の設問1は04年版になくなった。課題で読解力が求められることがなくなり、その意味では04年版テストの妥当性が上がったと言えるであろう。さらに、タスクは可能な限り現実生活にあるようなものにすべきである。99年版での設問1の形式としては、受験者が試験官に自分自身について書くことと違って、04年版では受験者が手紙を書かなければならない。課題はより現実的（よりオーセンティシティーの高い）ものになった。04年版の課題はよりコミュニケーション的な性格を持つ課題である。

産出的な能力である作文力の場合、信頼性の高い採点方法の確保は重要な問題である。採点方法としては、作文の全体的な印象に基づいて、単一の得点を与える総合的採点法（holistic scoring）と1つのタスクの複数側面のそれぞれに対して個別の得点を与える分析的採点法（analytic scoring）がある。得点から診断的情報を直接読み取ることが必要な場合には、分析的採点法でなければならない。99年版は分析的採点法を使用する。

99年版の「作文力テスト」の採点は「評価用チェックリスト」によって行われる。「評価用チェックリスト」の内容を見ると、課題に適切な対応、再現した情報の正確さと情報の量、発話の論理性と整合性などの能力が評価対象となっている。各部門の相対的重要性が配点に反映される。また、誤りの頻度と誤りが意味の伝達に及ぼす影響は高い相関関係にはない。数少ないある種の

文法的誤りのほうが、数少ない別の種類の文法的誤りよりも、意味の伝達に対して侵害な影響を及ぼすことはありうる。

「評価用チェックリスト」の存在によって、コミュニケーション活動をテストする場合においても評価対象は明確に設定され、これまでに見られた妥当性を下げるような要素、すなわち、採点において、測ろうとしている能力以外のものを測るということは見られない。

採点尺度は大きな波及効果を持つ。それは受験者に評価の基準を教える。残念に、04年版は採点に関する情報を含んでいない。これは04年版テストの利用を妨げる大きな欠点となっている。

## 6. 口頭発表力

「口頭発表力」テストの目的は対話とモノローグの能力の測定である。このテストでは試験官が受験者の対話の相手となり、面接方式でテストが行われる。99年版と01年版の『規準』によれば、「口頭発表力」テストでのモノローグの課題発話量は変わらず7文となっている。一方、受験者が理解しなければならないテキストのボリュームは150 - 180単語から150-200単語まで増えており、1%の未習語彙のノルマも導入されている。ちなみに、未習語彙は他のテストにも含まれている。「口頭発表力」テストで評価の対象となるのはスピーキング能力であるが、その能力を直接、測ることは重要である。テストは間接的になればなるほど、妥当性は下がるが、TORFLでは、実際の会話の形でテスト・評価が行われることで、スピーキング能力評価についての高い妥当性を保つことできている。

99年版で試験官自身がダイアログの相手になり、また、受験者のモノローグを促す発話を行う。テストの時間は45分である。

設問1（問1-5）では、試験官の日常生活に関する質問に対して受験者が回答する。すなわち、与えられた状況に応じて相手の発話を理解し、ダイアログに参加して適切な応答を行う能力のテストである。すべての回答はフリーレスポンスの形式である。発話時間は4分間である。

設問2（問6-10）では、試験官によって与えられた状況に応じて受験者はダイアログを導入する。発話時間は5分間である。以上の設問は準備なしでの発話能力を測るものであり、日常生活の場面で使用される表現力が評価される。

設問3（問11）では、受験者は与えられたテキスト（テレビ番組表、180単語まで）について内容要約を行い、モノローグの形で自分の意見を述べる。準備時間は15分間で、発話時間は5分間である。読解の際に辞書の使用が可能である。この課題では、自分の好きな番組についてそれを選んだ理由を伝えることが課題となっており、定型表現ではなく、より自由度の高い、内容的にも幅の広い表現力が求められる。

設問4（問12）では、受験者は所与のテーマと3つの質問を手がかりに7文までのモノローグ形式の発話を行う。準備時間は9分間、発話時間は6分間である。辞書の使用が可能である。この設問では、受験者は家族のメンバーが好むテレビ番組とその理由、さらに、受験者が学校時代にどんな番組が好きであったかについて説明しなければならない。このテストは、実生活を反映した課題であり、完全に自由スタイルの発話を要求するテストとなっている。タスク遂行の目的が明確であり、コミュニケーション性格を持つ課題と言える。

ところで、「口頭発表力」テストの実施時間は45分間となっているが、様々な言語能力を測る総合テストのスピーキング下位テストとしては、異例に長い時間が設定されている。長時間のテストで様々な角度から口頭発表力が測られ、テストとしては高い信頼性を持つことになるが、妥当性の観点からみれば問題がないとは言えないだろう。

99年版の設問3の難点はモノローグの発話にある。受験者には辞書使用可能な10分間の準備時間が考えられている。発話する前にテキストの内容要約をしなければならないので、口頭発表力だけでなく、読解力と記憶力も必要とされる。すなわち、測定すべき対象とする能力以外の能力が評価に関わってくることになり、これは、この設問においては「口頭発表力」のテスト全体

の妥当性を下げることにつながりかねない。

05年版における基礎レベルの「口頭発表力」テストについて、林田は次のように指摘する。99年版のテストに比べて、「口頭発表力テストでは第3問の読解用テキストが量・内容ともに難易度が高くなっている点を除いては、さほど大きな変化点は見られない<sup>4)</sup>」。すなわち、基礎レベルで「口頭発表力」テストの半分近い時間を占める、辞書の利用を認める難易度のかなり高い設問3のレベルがより上がっているのである。単語数だけで見ると400ワードから600ワードまで増えている。

さて04年版、初級レベルの「口頭発表力」テストであるが、99年版に比べて大きな変更が加えられている。設問1と設問2はそのまま残っているが、上で問題となった設問3は、逆に、テストから姿を消した。その一方で99年版の設問4に該当する04年版の設問3の量が増えている。所与のテーマと10の質問を手がかりに10－12文までのモノログ形式の発話を行うという課題である。99年版の設問3に当たる課題の削除によって、04年版テストの妥当性は上がったと言えるだろう。さらに、テストの時間も45分から25分に短縮したので、テストはより経済的になった。しかし、「作文力」テストと同様に、04年版の「口頭発表力」テストにも採点基準の説明がなく、問題を残している。

## 7. テストの問題点

TORFLは標準テストである。標準テストは、精密な実験や検査を受け、妥当性などテストの質に関する指標に合致しているかどうかを検証される。標準テストの作成、実施プロセスでは統計的データが使用されなければならない。統計的なデータを使って改良されたテストの利用は、間違いなくテスト改善のために新しい資料を提供することとなる。このようなテストが実施される場合に初めて、TORFLでは標準テストが使われていると言うことができるであろう。しかし、統計的なデータはまだ発表されていない。そのため、TORFLの重要な問題点としては、テストは不十分な妥当性、すなわち言

語能力の測定に関して十分な正確性を持つという点に関してデータの証拠の不足を挙げることができる。

テスト改良の問題をそのオーセンティシティーの向上の立場からも検討することができる。TORFLの問題は異なるレベルのコミュニケーションな性格を持つタスクを含む。完全な意味でのコミュニケーションな性格を持つのは「作文力」テストだけである。他のテストのオーセンティシティーを高めるために十分な可能性がある。

教育とテスト・プロセスにおいて知識評価の正確性を高めるためには、テスト問題の標準化だけではなく、様々な学習者の需要を満たす教材とテスト課題を作成する必要があるということの意味している。ロシア語圏以外のロシア語教員は、それぞれの国の文化・メンタリティーを考慮に入れた民族志向テストバージョン作成の必要性を感じている。現在のところ、ロシアで作成された教材とテストのバージョンは主にロシアの大学で勉強する受験者だけを想定して作成されているのである。

また、TORFLは世界で一番長い言語テストの一つであるという印象はぬぐえない。ロシア語能力をできるだけ徹底的に測定するという、テスト作成者の狙いは理解できる。しかし、重要な意思決定（入学合否判定、クラス分けなど）に関わらない初級レベルの試験は、初級（入門）レベルの教育での、動機付けの役割を果たすべきものであり、ロシア語の勉強に興味を起こさせるきっかけとして考えるべきかもしれない。テストがあまりに難しいことで多くの受験者を見込めない事態にもなる。現在の初級（入門）レベルより下のレベルの、より簡単なテストを導入すべきというロシア国外の教育者（在日本を含めて）の提案については、現在のところロシア教育科学省は認めていない。

## 8. おわりに

全体としてみると、TORFLの初級レベルのテストは完全にコミュニケーションテストではないが、コミュニケーション言語能力を十分に測定している。テストは、授業活動で学習するすべ

ての技能を測定するのでかなり高い妥当性を持っていると言える。テスト作成者は、言語の基礎である文法と語彙内容をチェックするためにコミュニケーションではない、多肢選択肢の「文法・語彙力」テストを導入しているが、04年版では「文法・語彙力」テストも、よりコミュニケーションな課題になるような工夫がなされている。

「読解力」テストと「聴解力」テストの04年版は、まだ完全にコミュニケーションテストにはなっていないが、よりオーセンティシティーが高いテストとなった。「作文力」テスト04年版は、読解力の能力が関係しなくなったので、テストの妥当性が上がった。「口頭発表力」テストは面談形式の会話の形で実施され、高い妥当性を持つと言える。採点は、「分析的採点」の方式で行われるので信頼性が高い。

99年版テストにおける、妥当性の観点からみた難点は04年版で改善されている。全体的には、04年版はコミュニケーション・テストングにより相応しいテストであると結論することができるであろう。ただ、04年版における語彙のレベルは高くなっており、語彙量かなり増え、難易度が上がっている。また、テストの説明と「評価用チェックリスト」も含まれておらず、難易度の点も含めて、ロシア国外での普及には大きな問題が残るのである。

(2011年6月15日受付、2011年7月19日受理)

## 注

- 1) Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment (ヨーロッパ言語共通参照枠)
- 2) 林田 (2010) 林田理恵研究代表者『到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠したロシア語総合

- 試験開発』大阪大学大学院言語文化研究科、5ページ  
3) 同上、19ページ  
4) 同上、20ページ

## 参考文献

### 和文

- 白山 利信 (2007) 「ロシア語検定試験」『日本私学教育研究所調査資料』No.243.  
根岸 雅史 (2007) 『コミュニケーション・テストングへの挑戦』三省堂.  
静 哲人、竹内 理、吉澤 清美共編著 (2002) 『外国語教育リサーチとテストングの基礎概念』関西大学出版部.  
林田 理恵 (2010) 林田理恵研究代表者『到達度評価制度構築のための「国際基準」に準拠したロシア語総合試験開発』大阪大学大学院言語文化研究科.  
ヒューズ、A. (2003) 『英語のテストはこう作る』研究社.

### 露文

- Андрюшина Н.П. и др. (1999) Типовые тесты по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение М.-СПб.; ЦМО МГУ - «Златоуст».  
Антонова В.Е и др. (2004) Типовые тесты по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Общее владение М.-СПб.; ЦМО МГУ - «Златоуст».  
Владимирова Т.Е и др. (1999) Государственный образовательный стандарт по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Проект. М. - СПб.  
Владимирова Т.Е. и др. (2001) Государственный стандарт по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Проект. Издание второе, исправленное и дополненное. М. - СПб.  
Образовательная программа по русскому языку как иностранному. Элементарный уровень. Базовый уровень. Первый сертификационный уровень. М., (2001)



# Test of Russian Federation State Test for Speakers of Russian as a Foreign Language (Beginner`s Level))

Tolstoguzov ALEXANDER

## **Abstract**

This article is devoted to an analysis of the elementary level test of Russian, which is one of the official tests of the Russian state system of Russian as a Foreign Language (TORFL). It's a standardized test which determines whether the student has achieved the elementary level of competency in Russian as a foreign language. The test consists of five sections. Each section tests a different type of language proficiency.

This study aims to investigate the test of Russian in connection with its ability to measure the communicative competence of students.

The first version of the oral test of Russian as a foreign language, officially published in 1999, is compared with the new version, published in 2004. The new version has some new features both in types of tasks and their arrangement inside the test.

The results indicate that the whole test became more communicative and authentic test. But at the same time it became more difficult in content and implementation.